



I-OWA マンスリー・セミナー講演より お金、株式会社、資本主義の歴史、そして未来は？

講演： 岡本 和久
レポーター： 赤堀 薫里

お金の歴史は、国家、宗教、商業が織りなしていることをすごく感じます。前史でいえば、自給自足から始まり、商品の融通が生まれ、集団生活が始まると生産の専門化が生まれ、物々交換が始まる。コミュニティーとコミュニティーの間の物々交換が始まると、そこに市ができて、市において常に汎用性の高いものにとりあえず交換しておこうという動きになる。それがだんだん貨幣に変化していきました。



お金の価値は、時間と空間により決まります。もともとユダヤ教以外の宗教は利子を取ることを認めていませんでした。しかし、実質的な利子を取る抜け道もありました。各国違う通貨の為替レートの中に、金利分を織り込んで取っていたのです。そんな中、メディチ家などの商人が富を蓄積しました。

宗教改革が起こり、キリスト教サイドも徐々に金利を取ることを容認するようになりました。ベネディクト 14 世は「時には価値がある」と正式に認めます。それ以来、お金によって金利を取ることが通常の行為として認められるようになってきた。

空間移動で価値を増やす。これは大航海時代、東インド会社をみればよくわかります。アービトラージです。ある場所で安いものを買って、別の場所へ持って行くと高く売れる。移動することや時間を延ばすことによって、お金は価値を増やしていく。この辺にお金を生み出す利益の源泉があります。





FIWA 通信「インベストラ이프」

もう一つ言えることは、「余りものに値なし」ということです。これは、余っているものはだんだん値段がつかなくなってきました。今、世界各国がコロナ不況への対応もあり、通貨をどんどん発行しています。それが必要であることはよくわかります。しかし、大きなものを実は失っているのではないかという不安も感じます。それは国家の持っている信用です。1 単位当りの通貨の信用度が、通貨が増えれば増えるほど希薄化していく。その点は忘れるべきではないと思います。世界全体がやっているからいいのではないか。インフレは起こらないのではないのか。でもどこかで必ず何らかの咎めがくるだろうと思います。どんな形でくるのかは、発想が及びません。

情報技術が世の中を大きく変えています。個人や企業などの組織間での相互信用が、書き換えることのできない形で人々に共有される。結局、国家の信用が薄くなる一方で、情報ネットワーク社会の中における 1 人 1 人の信用情報が、共有できるような体制ができてくる。

個人や組織が提供する流通手段が、通貨に変わる媒体になってくるのかもしれませんが。GAFA のような巨大企業が独自の通貨を発行するかもしれません。リブラという話も出てきています。同じ事です。一つの国とグローバルな組織のどちらが信用できるのかということが問われることになるでしょう。まあ、まだ、だいぶ先の話だとは思いますが。

ある時、竹田和平さんが私とお話をしている時、「今は資本主義の時代だからお金はとても大切です。でも、いずれボランティア経済の社会がくるでしょうね」とおっしゃっていました。今、クラウドファンディング、応援商品など、いろいろな形で個人が自分の思いを直接お金にのせることが増えつつある。ESG も機関投資家が考えるものではなく、個人一人一人が考えるべき問題です。今、非常に面白いことが起こりつつあると思います。和平さんがおっしゃっていたことの兆候かなと思っています。

個人がお金を発行することができるかもしれない。特定の集団がネットワークの中で、参加者の相互の信用が改ざんできないような形で維持されるようになれば、それも可能かもしれません。もっとも、完全にそうなるには人類の精神性がもう少し向上しないといけないでしょうけれど。

講演では、初めてお金ができた 2700 年前からの長い歴史を、外国編、日本編、近來編とテーマに分けて通貨制度の進化をわかりやすくお話いただきました。